

北陸大学図書館報

NO.46



◆◆ 第18回読書感想文コンクールの審査を終えて ◆◆

経済経営学部教授

読書感想文コンクール審査委員長

南谷 直利

このたび第18回北陸大学読書感想文コンクールが実施され、325名の事前登録があり、最終的に192編の作品応募がありました。登録や応募をしてくれた学生の皆さんと本学教員・職員・関係者の方々に感謝しています。ご参加とご協力を頂き、誠にありがとうございます。

最優秀賞に中村愛結さんの『人魚の眠る家』東野圭吾著、「正しい選択とは」の作品が選ばれました。「人の生死」に直面して、患者本人、その家族、医療従事者のそれぞれの思いと制度環境に対する矛盾の葛藤が、見事に描かれています。脳死から臓器移植への過程での数多くの問題点を整理し、作品を通して人間らしい行動をとる幸福感が伝わりました。

中村さんをはじめ、他19名の入賞者とベストタイトル賞の1名の皆さんは、各審査員の高い評価を獲得しました。最終審査対象の33編については、審査員に氏名、性別、所属学部等を伏せており、先入観無く審査が行われました。いずれの作品も「本を読んで、今の自己の感性を問う」目的で、作成されていたと思います。

小原千都さんの優秀賞受賞作『手紙屋～僕の就職活動を変えた十通の手紙～』喜多川泰著の81頁に、受賞者も間接的に言及しているように、「平時はあなたの頑張りで他の人の分まで働いて、他の人の給料を稼ぎ出す人になる。とてもやりがいのある仕事だと思ふんです。実際に人の上に立つ人、つまり上司はそれができる人でなければ務まりません。部下の分まで働いて得た収入を部下に配分することができる人でなければ無理なのです」と、明確に上司のあるべき姿が記されています。日本人やドイツ人に対して言われている勤労勤勉の質の高さは、世界的に評価されていると感じます。日々の読書の積み重ねが、高い倫理観を有する人間形成に役立つとも思います。

また同頁では、皆さんの感性についても問うています。いかなる年代でも、読書を通して感性を研ぎ、倫理観を向上させていく努力が肝要です。刑務所や少年院に本が整備されているのは「人間」の施設空間だからであり、社会や学校から本が無くなれば、その場所はアニマルファーム、つまり人間形成もボーダーフリー化するでしょう。

平成31年1月15日(火)に図書館本館ソフィアルームにおいて、コンクールの表彰式と優秀賞以上の入賞者によるビブリオトークが行われ、竹井巖図書館長から入賞者に表彰状と記念品が授与されました。審査委員、図書館委員にご出席を頂き、入賞者と記念撮影をしました。ビブリオトークでは、入賞者に作品図書を手紙に、図書紹介と読書への考えを詳しく解説して頂きました。

第18回 読書感想文コンクール 審査結果発表

応募作品192編の中から、次の作品が選ばれました。

入賞作品

最優秀賞

中村 愛結 正しい選択とは (医) 1年

優秀賞

小原 千都 『手紙屋』を読んで (医) 1年

野関 優希 愛と死と言葉 (医) 1年

加戸 なな子 『タイヨウのうた』を読んで (国) 2年

加藤 真望 『希望の作り方』を読んで (国) 1年

佳作

川端 ゆきみ 無意識の世界から (医) 1年

倉地 佑季 『死ぬ瞬間・死とその過程について』を読んで (医) 1年

苗代 茉奈 救う (医) 1年

東 杏奈 後悔しない生き方 (医) 1年

高橋 まるみ 心の中の小さい国際協力師 (国) 1年

努力賞

澤野 雛子 ヒトの感情はDNAの支配下にあるのか (医) 2年

栄前田 恵玖 『明日もまた生きていこう』を読んで (医) 1年

北川 暖 関係の形成過程に安堵するか後悔するか (医) 1年

小林 七海 偉人、福沢諭吉 (医) 1年

西野 早稀 『羅生門』を読んで (医) 1年

宮竹 瑠花 『日本一心を揺るがす新聞の社説』を読んで (医) 1年

吉田 理桜 生きる (医) 1年

山本 恵里 幸せのカタチ (国) 1年

山本 未来 『海と毒薬』を読んで (国) 1年

党 芸博 『雪国』を読んで (未) 3年

ベストタイトル賞

狩野 希実 今、私にできること (未) 3年

(書名『この世界から猫が消えたなら』)

* (医)は医療保健学部、(国)は国際コミュニケーション学部、(未)は未来創造学部です。



表彰式 (平成31年1月15日)



書名 人魚の眠る家
著者 東野 圭吾
出版社 幻冬舎

私がこの本を選んだ理由は、この本が医療に関する内容のストーリーだったからです。医療保健学部に入學してから約4ヶ月。入学前よりも医療系の本が読みやすくなっているのではないかと思います。本を探し始めました。おすすめの本の中にこの『人魚の眠る家』があり、あらすじに書かれていた「脳死」という言葉が目にとまりました。最初は内容が難しそう、と思い他の作品を考えましたが、「死」というものはどんな生き物にとっても、医療の世界においても避けられないし、「脳死」という普段ではあまり意識したことがないものを考えるのにより機会になると思ってこの本に決めました。

この本は「プールで溺れて脳死状態になった娘を持つ母親の気持ちや葛藤、家族や周りの人々の命に対する考え方」を書いた1冊でした。脳死の娘を持つ母親、その母親の身内、脳死の娘の治療に当たる医師や看護師、母親の知人や上司、臓器移植を待つ患者とその家族。場面が変わるごとにいろいろな立場で語られる構成になっており、それぞれの立場での考えや感情がとても伝わってきました。

その中で私が一番深く考えさせられたことは、脳死になった人に対してどんな選択が一番よいのか、ということでした。最近では、「臓器提供意思表示カード」がよく知られるようになり、自分の意思をあらかじめ記録しておくことができます。しかし、脳死などを考えたこともない子供はどうするのでしょうか。臓器移植法の改正により、年齢制限が廃止されて子供の臓器提供を決定するのは親の権限となりましたが、本当に親が決めてもよいことなのでしょうか。「脳死」に対し親は、まだ心臓が動いている我が子の体から臓器を取り出すなど考えられないはずで。この本の中の母親のように「どんなに犠牲を払っても守るべき命を守る」という気持ちはどの親にでもあると思います。一方、この世界には臓器移植しか治療の方法はなく、臓器提供を待つ人がたくさんいます。その中には子供も多く、その家族や臓器提供運動を行う団体は、病気の子供を守るのに必死なため、脳死の子供を持つ親の延命治療に対して批判的です。脳死の子供を持つ親は、自分の気持ちと他の意見の板挟みになり、葛藤しながら子供にとって何が一番よいのかを選択し決定しなければなりません。それは病んでしまいそうなほど苦痛なことだと感じました。

私は以前、学校の課題で「脳死」について調べたことがありました。「脳死に対する考えは世界の国々によって異なり、ある国では脳死を‘人の死’とするが、日本では臓器提供を意思表示する人だけが脳死判定をもって脳死とされ、その他は心臓死となる」らしく、日本では脳死の人の死の選択肢があるために、脳死の子供の死の決定が難しいそうです。この本を読んで、その意味が具体的にはっきり分かりました。そのとき私は、臓器提供をしてもいいな、と自分自身のことは考えましたが、もし家族が脳死状態になったらということは考えもしなかったのではと後悔させられました。「脳死」について表面的だけでなく感情的にも理解し、「命」について真剣に考えるよい機会になりました。

この本の中の母親は、3年の介護を経て臓器提供を決断しました。私は、この決断が脳死の娘にとって最善の選択だと思いました。普通は自分の子供が脳死状態という現実も受け入れたくない中で、この子の臓器が他の子の役に立つなら、と考えることができる人はそんなにいません。どんなに時間がかかっても、周りからどんな目で見られても、その母親が葛藤して悩んで選択したことに意味があると思います。こんなに多くの人が命について考え、苦しんだり気持ちをぶつけ合ったりしてひとつの決断をすることにとっても感動しました。この本から学んだ、脳死から臓器移植までに数え切れない感情や矛盾があり、葛藤があることを心にとめて、今後の勉強に活かしていきたいです。そして、患者やその家族のそれぞれの思いや選択を理解できる医療従事者を目指したいです。

審査委員講評 倉島 由紀子 (薬学部講師)

一人の「脳死している可能性の高い」少女をめぐる、様々な人たちの想いが述べられている本書。それに対して筆者はそれぞれの立場の人たちに心を寄せ、自分自身とも対話しながらこの感想文を書いたことが良く分かります。「脳死」を単なる言葉の定義としてではなく、その複雑な本質を本書から理解した筆者だからこそ、この感想文を書くことができたのでしょう。



書名 「手紙屋」～僕の就職活動を変えた十通の手紙～
著者 喜多川 泰
出版社 ディスカバー・トゥエンティワン

私は、今まで本を読むことがとても退屈で、課題で読書感想文の提出が必要だった中学3年生以降、1冊も本を読むことがなかった。そして、今回の読書感想文コンクールがなければ、私は本を読まない人生を歩んでいたかもしれない。そんな私は、書店に行っても読みたい本が見つからなかったため、仕方なく、高校の卒業式当日に配布された、喜多川泰さんの『手紙屋』を読むことにした。

本の内容としては、就職活動中の主人公が、あるきっかけで「手紙屋」という存在に気づき、手紙屋との10往復の文通によって、主人公の人生やお金、仕事への価値観が変化し、成長していくというものだった。

手紙屋に出会う前の主人公の性格や持っている価値観は、私と同じように感じた。特に、物事に失敗すれば、「自分には才能がない」といって投げ出したり、人間関係が上手くいかなくなると、「あいつとは合わない」と決めつけたりする部分は、私と全く同じであった。

そのため、手紙屋が主人公のために書いている手紙は、僕の為にも書かれているように感じた。そして、私は手紙屋から送られてきた手紙から、多くのものに対する考え方が変化していった。大きく変化した点は3つあった。

まず、欲しいものを手に入れる方法である。手紙屋の考え方は、「物々交換」というものであった。私は、物々交換を行って生活している人など見たことないので、手紙屋の考え方が理解できなかった。しかし、「相手の持っているものの中で自分が欲しいものと、自分が持っているものの中で相手が欲しがるものとお互いがちょうどいいと思う量で交換している」という言葉で、物々交換という考え方を理解することができた。例えば、社員は時間や労働力を会社に加え、会社はお金と安定を社員に与えるという関係や、人同士でおこなうものではないが、新聞やテレビニュースなどに時間を使うことで新たな知識を得ることができる関係など、私たちは、知らない間に物々交換を行っていると思ったからだ。この本を読む前までは、私は、この世のもの全ては結局お金があれば手に入れることができると考えていたので、自分は人間としてとても小さな人であったのだと思った。また、勉強においても、テストで良い点数を取りたいにもかかわらず、それに適した勉強をせず、点数が取れないと「この教科は苦手だ」と言い訳をしていたので、目標に適するまで勉強しなければならぬと反省した。

次に、人との関わり方だ。手紙屋の考え方としては、「すべての人にあらゆる性格が備わっているため、相手にこうなってほしいという『称号』を与えてしまう」というものであった。確かに、私も友人に「親切な人」と言われてから、その友人にはいつでも親切な人を装っているなどと思った。だから、今までは、「あの人は〇〇な性格だ」と勝手に思い込んで、仲良くしたり、関係を切ったりしていたが、これからは相手に称号を与えていこうと思った。

そして最後に、いろいろな物事に対する関わり方だ。手紙屋の考え方は「どんな事に対しても全力で取り組む」ということだった。このことは、わかってはいたものの、いざ自分にとって難しい課題が立ちまわると、「自分にはこれは合わない」と言って、簡単に楽なことばかりを行っていた。しかし、私は来年で20歳、つまり大人の仲間入りを果たすので、いつまでも自分に甘えずに、どんなことにも、成功するまで全力で取り組んでいこうと思った。

また、今回の読書感想文コンクールのおかげで、本には人生を動かす力があることに気づくことができ、とてもよかった。これからは、様々な本を読んで、いろいろな知識や考え方を得て、人生を豊富なものにしていきたいと思った。

審査委員講評 南谷 直利 (経済経営学部教授)

「僕にとって本は、素晴らしい師匠であり、一生付き合っていける友人であり、いろんなヒントを与えてくれる先生でもあるんだ。そういう本に出会ったときの感動は、何とも言えないんだよ。自分の未来がすべて光り輝いて見える瞬間なんだ」と、91頁に記されています。優秀賞受賞の小原千都さん、本当にありがとう。我々の思い(読書の重要性)を小原流で代弁して頂き、久々にすがすがしい気持ちになりました。



書名 死んでしまう系のぼくらに
著者 最果 タヒ
出版社 リトルモア

私がこの詩集を読もうと思ったのは、大好きなロックバンド[ALEXANDROS]がきっかけだった。[ALEXANDROS]が5月に発売したシングル“KABUTO”に収録されており、東京メトロのCMソングにもなった“ハナウタ”。この曲によって私は最果タヒさんを知った。[ALEXANDROS]の楽曲は、ほぼ全てボーカルの川上洋平さんが作詞作曲を手掛けているのだが、このハナウタの作詞をしたのが最果さんである。初めは川上さん以外の人、しかも私にとっては名前すら聞いたことのない人が作詞をすると思って、少し残念に思った。しかし、実際に曲を聞いてみるとそんな考えはすぐになくなった。素敵なサビの歌詞に綺麗なメロディーと川上さんの優しい歌声が合わさっていて、ハナウタは[ALEXANDROS]の曲の中でもとても好きな曲になった。それと同時に、歌詞を書かれた最果さんについてもっと知りたいと思うようになった。私は今まで詩に興味を持ったことはなく、学校の国語の授業でしか読んだことがなかった。しかし、最果さんの詩は読んでみたいと思った。そして、この『死んでしまう系のぼくらに』を買った。ちなみに、数ある最果さんの作品の中からこの詩集を選んだ理由は、川上さんが初めて読んだ最果さんの作品が『死んでしまう系のぼくらに』であり、これを読んで詩の楽しみ方を知っていたので面白そうだと思ったからだ。

一通り読んでみて驚いた。私がハナウタの歌詞を見て最果さんに対して抱いていたイメージを良い意味で裏切られた感じがしたからだ。ハナウタはひとつひとつの言葉が綺麗で優しい、けれどどこか寂しさを感じる、そんな詩だった。一方で、『死んでしまう系のぼくらに』は愛と死がテーマになっていることもあり、“死にたい”や“ころす”などの重い言葉がたくさん使われている。最果さんがそのような言葉を使うイメージがなかっただけに意外だった。ただ、重い言葉を使っているにも関わらずそれほど重い印象はなく、むしろ軽くてポップな感じもして読みやすかった。以前、最果さんが、「言葉だけで音楽を作るみたいな感覚でいる。」と言っていたが、まさにそんな感じでメロディーはないけれど、ひとつの曲のように感じるような詩がたくさんあった。

この詩集には、44篇の詩が収録されている。私は詩をあまり読んだことがなく、読解力もそれほどないので、最果さんが詩に込めたメッセージを全て理解することはできなかった。しかし、その中でも印象に残ったものがある。それは“2013年生まれ”という詩だ。この詩には共感できる部分が多かった。「私は現代が好き。」という文から始まり、その理由として過去の人や未来の人には会ったことがないから興味がないとか、自分達が過去の保存をしたり、未来のためにがんばる理由がわからないと言っている。そして、「永遠に今でいいよ。もう誰も生まれなくていいし、だからもう誰も死ななくていい。」と続いている。私は今まで現代が好きかどうかなんて考えたことはなかったけれど、この意見には共感した。よくタイムマシンがあったら過去と未来どちらに行きたいかというような質問があるが、私は別にどちらにも行きたいとは思わないし、家族や友達には死んでほしくないから永遠に今だったらいいのにと考えたこともある。だから、たぶん私も現代が好きなのだと思う。「きみを幸福にできる可能性が死以外にないとき、意外とみんな、あっさり死をすすめる。」「しねるとおもうかもしれない。ちがうよ。きみは、今から殺されるんだ。」この言葉が心にグサツときた。例えば、友達が死にたいと言ってきたら私は止めるだろう。でも、何回説得しても思い直してくれなかったら私は諦めるかもしれない、そう思ってしまった。説得するのを諦めた瞬間、それは友達を殺したことになる。「きみは死んだらおしまいだから、だから私は何度だって、死ぬなっていうし、世界を憎もうっていうよ。」ものや世界は何度だって作り直せる。けれど、人はそう簡単にはいかない。1回死んだらそれで終わりだ。だからこそ、本当に大切な人ならば、何度も死ぬなと言わなければいけない、諦めてはいけない、当たり前のことかもしれないがそんな大切なことを改めてこの詩から学んだ。

この詩集を読んで最果さんのことがさらに好きになった。綺麗だけでなく人が隠したいと思うような裏の部分も曝け出しているような気がしたからだ。「音痴で、絵が下手で、思ったように踊ることも出来なくて、それでもなにか伝えたい人が、使う道具が言葉であることを、私は知っている。」「言葉にできないなんて、簡単に言わないで。」最果さんがあとがきに書かれた言葉だ。確かに言葉は誰でも使えるけれど、それで表現することはとても難しい。私も苦手である。でも、最果さんのように自分を曝け出して言葉で表現することができるようになったら何か変わるかもしれない、そう思った。

審査委員講評 倉島 由紀子 (薬学部講師)

詩集は読書感想文の対象になるのか?という問いを抱きつつ、選考のために感想文を読んだ。杞憂だった。そこには筆者が詩集を手にするまでの心情、一遍の詩に心引かれて思い巡らした感情が記されていた。詩集の読者である筆者は「(著者である) 最果さん」が「言葉だけで音楽を作るみたいに」書いたこの詩集の中に、「ひとつの曲のように感じるような詩がたくさんあった」と言う。本書を通して、筆者は著者が望んだように「一緒に話し」ている。

優秀賞

『タイヨウのうた』を読んで

国際コミュニケーション学部 2年次生

加戸 なな子



書名 タイヨウのうた
著者 天川 彩
出版社 SDP、ソニー・マガジズ

みなさんは、XP(色素性乾皮症)という病気をご存知だろうか。XPとは、紫外線に当たるとがん細胞が増殖し、皮膚がんになるという病気だ。そのため、太陽の光に当たることができず、夜しか外に出ることができないのである。私はこのような病気があることをこの本を読むまで知らなかった。この本では、そんな病気をもった16歳の少女が、病気と闘いながら、残された時間の中で、シンガーという夢に向かう、少女の強さが描かれている。

私がこの本を選んだ理由は、母にすすめられたからである。母が以前、この本を読んだことがあり、多くのことを考えさせられたと言っていた。だから、私が留学に行く前に、限られた時間の中で、それをどう過ごすかということであらためて考えてほしいという思いがあったのだ。

この本を読んで感じたことは、大きくわけて3つある。1つ目は、少女の強さが周りの人たちを支えていたことに感動した。彼女に残された時間が少ないとわかった時、家族は、「もう太陽の光に当たって、おもいっきり遊んでこい。」と言った。そう家族の心が折れかけていた時でさえ、彼女は、「いやだ、死にたくない。もっと長生きしたい。」という強い思いがあり、家族の心を支えていた。私が今まで見てきたドラマや映画、本では、家族が励まして支えるというパターンしか見たことがなかった。だから、彼女が家族を支えていたということが印象に残ったのだと感じた。

2つ目は、彼女の人柄が素晴らしいと感じた。彼女は屋外に出ることができないため、夜に外に出て歌の練習などしていた。また高校にも行くことができていなかった。そういったように、普通の人と同じように生活ができなくても、一切誰のせいにもせず、自分の生活できる範囲で楽しんでいたことに感動した。もし、私がそういう立場だったら、みんなと同じように生活したいという思いから、この病気で産んだ母を責めてしまったり、暗く閉じこもった性格になるのではないかと思った。しかし、彼女からは、そういった思いや、不安などを感じなかった。どうしたらそのようなになれるのか、私は不思議だった。

3つ目は、最後までシンガーという夢のために努力をしていたことに感動した。一時は、病気の影響で手が思うように動かなくなり、ギターを弾くのをあきらめていた。しかし、家族や友人の支えがあり、CDをつくることができ、そのCDは、彼女が亡くなった後、みんなを励ます存在となった。亡くなった後もなお、みんなを支えるような存在であることがすごいと思った。彼女の、あきらめないという強い気持ちと努力があったからこそだと感じた。あきらめず努力すれば、良い結果に繋がるのだということがわかった。

この本は、私のこれまでの生き方を見直すきっかけになった。私は今まで、自分に限られた時間があるなど考えたこともなく、その中で努力するということがなかった。しかし、生きたくても生きることができず、やりたいことがたくさんあるのに亡くなる人たちがいるということであらためて知った。そう思うと、私はすごく時間を無駄にしていると感じた。だから、まず、留学生活の1年という限られた時間を一生懸命に、後悔が残らないように過ごすと思った。また、太陽の光に当たって生活することが当たり前だと思って生きてきた。しかし、それが当たり前でない人もいるということを知った。これからは、今生活できていることを当たり前だと思わず、周りの人に感謝して、1日1日を大切に生きていこうと思う。また、彼女が周りを支えていたように、私も周りの人を支えることができるような人になりたいと感じた。また、このように考える機会を与えてくれた母に感謝したい。

本を読むことで、自分とは違う人生に触れたり、考え方の違いを知ったりすることができます。自分で気がついたことや感じたことが、今後の自分の生き方が少しでもプラスの方向に向けば、読書の価値があったと言えるのではないのでしょうか。『タイヨウのうた』は映画化され、原作と映画では表現方法が異なり、どこに感動したり共感したりするかは読者の感性に依存されます。この感想文は、本を読んで感じたことを率直に文章にし、自分の生き方や目標を明確に掲げている点を高く評価しました。

優秀賞

『希望のつくり方』を読んで

国際コミュニケーション学部 1年次生

加藤 真望



書名 希望のつくり方
著者 玄田 有史
出版社 岩波書店

これまで、私にとっての希望とは、持っていれば良いものであった。しかし、明確な根拠はなく、ただ漠然とそう考えていた。そもそも、希望は要らないのではないかと疑うことさえもしなかった。広辞苑で「希望」の意味を調べると、「ある事を成就させようとねがい望むこと。将来によいことを期待する気持。」とある。私たちは普段「希望に満ち溢れる」「希望通り」「希望を持って」など、自然に「希望」という言葉を使っているが、私自身その意味を深く理解して使うことはしていなかった。私が手に取った「希望のつくり方」という本を読んだことによって、「希望」とはいったい何なのか、どうすれば自分の人生を「希望」によってより良く過ごしていくことができるのか、そしてどのように「希望」はつくられていくのかといったことのヒントが得られたと感じた。

私が特に印象に残っているポイントは2つある。

まず、「希望」と「挫折」は密接に関係しているという点である。広辞苑で「挫折」の意味を調べると、「途中でくじけ折れること。ダメになること。」とある。一見すると、「希望」と「挫折」は正反対でなんら関係のないように思われるが、筆者が過去に行った希望学のアンケートやインタビュー調査から、自らの挫折経験を理解し、語るることができる人ほど未来の希望を語るができるという傾向がみられた。私はこれらのことから、「いま」「その時」に感じている挫折による悲しみや悔しさ、無力感なども自分なりに分析していこうと考えた。「いま」「その時」は「挫折」と「未来の希望」を繋ぐ重要な地点である。ネガティブになり、その時点であきらめてしまうのではなく、「なぜ失敗してしまったのか」「さらにうまくやる方法はないのか」など、自分が挫折してしまった原因・理由を自ら考え理解していけば、改善点が明らかになっていき、思い描いていた状態に近づいていくはずである。

次に、希望は実現することよりも、探し、出会うことに意味があるという点である。私は希望を実現することこそが最大の目的で、実現すればそれ以上のことはないと考えていた。そのため、希望が実現するまでの、「希望を探し、希望に出会う」というプロセスを意識したことはなかった。しかし、希望と出会うために過去を振り返り、時には今ある状況から距離をとって、客観的に物事を考えているその瞬間こそ、希望に着実に近づき、その人自身が一番輝いて見える瞬間だと気づいた。「希望」はそう簡単に探し出し、出会うことができる訳ではない。時間や労力がかかり、無駄に思われ、放棄したくなることもあるかもしれない。だからこそ、希望に出会い、実現することが出来た時には、これまでにない達成感につつまれるのだ。この達成感も新たな「未来の希望」へのモチベーションにつながって行くのではないかと思う。

私がもし、大学在学中や社会に出たときに大きな壁にぶつかり、どうしようもないと感じたときには、希望に出会うために、もう一度この『希望のつくり方』を読み返したいと思う。私は自分の失敗や挫折を他人に話すことには抵抗を感じているし、これまではなるべく話さないように努力していた。なぜなら、恥ずかしく、人から何か批判されることが怖かったからだ。しかし、『希望のつくり方』を読んだことによって、自分の挫折経験を語ることの価値、さらに希望を実現するまでのプロセスにこそ意味があると気づく事ができた。これからは、留学先での自分の語学力の低さや、思い通りに伝えることが出来ないもどかしさなどで、挫折を経験することがあるかもしれないが、「挫折」を自分なりに理解し改善していき、「未来の希望」へとつなげ、希望に満ちあふれた大学生活を過ごして行きたいと思う。

審査委員講評 轟 里香 (国際コミュニケーション学部准教授)

希望とは、人間が生きていくうえで重要な役割を果たすものです。希望には、倒れていた人を起き上がらせるほどの力があります。古くから、希望をテーマとして、多くの文学作品が作られてきました。これほど重要なものでありながら、希望は、とらえどころのない不思議な存在です。『希望の作り方』は、「希望学」の研究成果を基にした興味深い本です。その中から、受賞者は、希望と挫折との関係と、希望を探すプロセスの重要性に焦点を当て、自分との関わりから感銘を受けた点を述べています。

◆◆ 第1回ビブリオトーク開催 ◆◆

1月15日(火)、図書館本館ソフィアルームで行われた第18回読書感想文コンクール表彰式の後、第1回ビブリオトークが行われました。ビブリオトークは今回初めての試みであり、最優秀賞・優秀賞の学生3名が自分の読んだ本について、その本を読んだきっかけやおすすめポイントなどを熱く語りました。他の入賞者達は興味深く聞き入っていました。

◆◆ 本館の閲覧室を教室として使用する時間があります ◆◆



2019年3月、本館の2階及び3階の閲覧室が授業でも使用できるよう、教室として整備されました。授業中は資料の閲覧等が出来なくなり、ご利用の方には一旦退出していただく等、ご迷惑をおかけしますが、ご了承の程よろしくお願ひします。

◆◆ 寄贈図書 ◆◆

本学の役員・教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

書名		寄贈者
『愛なき世界』 他	計106冊	泉 洋成 (理事)
『骨粗鬆症診療における骨代謝マーカーの適正使用ガイド』		三浦 雅一 (理事・薬学部教授)
『考える技術』 他	計2冊	南野 茂 (理事・事務局長)
『雪と氷の事典』 他	計30冊	竹井 巖 (図書館長・薬学部教授)
『寛容を基盤においた生命尊重の教育に関する研究』 他	計2冊	東風 安生 (経済経営学部教授)
『カントの批判的法哲学』	計2冊	松本 和彦 (経済経営学部教授)
『中日辞典』		生駒 俊和 (医療保健学部准教授)
『臨床工学技師のための臨床実習が楽しくなる本』		高橋 純子 (医療保健学部准教授)
『Second Language Acquisition of English Prepositions』		木下 雅之 (学事本部長)

北陸大学図書館報 NO. 46 平成31年3月31日発行

編集・発行：北陸大学図書館 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1 TEL. 076-229-3021 FAX 076-229-4850

Eメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp 北陸大学図書館ホームページ：<http://www.hokuriku-u.ac.jp/about/campus/library/>